

「教育のあるべき姿」を取り戻せ

「オタクたちのための学校」じゃない

インターネットは今や、なくてはならない日常のインフラとなった。家のパソコン、携帯電話、スマートフォンと、日進月歩するテクノロジーに、我らは大きな影響を受けてきた。新しい技術によってもたらされるライフスタイルの変化は、光と影の両方を投げかけてきた。

そんななかで、インターネットの強みを生かした新しい学校の形を目指す学校が、2016年4月に立ち上がった。その名も「N高等学校（N高）」¹。学校法人の角川ドワンゴ学園が主体となって立ち上げられたこの学校は、沖縄県うるま市に所在している通信制の私立高校だ²。

みなさんは「ニコニコ動画」という若者に人気のインターネット共有動画サイトをご存知だろうか。ドワンゴは「ニコ動」などを擁するエンターテインメントに強みを持った企業だ。N高の学生は、どこでも好きなときにインターネット上で授業を受けることができ、年に5日間程度の登校でレポートなどを提出することで高校卒業の資格を得ることができると言う。

心ない人たちは、N高を「オタクたちのための学校だろう」と揶揄する。そんなことはない。提供するカリキュラムのなかには、イカ釣りや狩猟、農業体験など、地方自治体と連携した課外授業も用意されている。ただ単にITに強いだけでなく、卒業後に地域の活性化にも寄与できる人材を育てていこうとしている。

このN高のブレインの一人であり、理事として名を連ねているのが、夏野剛さんだ。夏野さんは慶應義塾大学で特別招聘教授として教えながら、さまざまな企業の外部取締役を務めているスーパーマンである。ドコモのiモード立ち上げの主要メンバーとしても知られている。そして、2010年に僕がバンブーラッシュでeRaiichanを立ち上げたときから、今でもずっと応援してくれている心強いメンターの一人だ。

N高誕生のニュースを聞いた際、僕はなんともエラそうに「2030年を見据えて仕掛け始めたライバルであり同志が現れた」と感じた。それと同時に、インターネットの光と影を知悉する企業が、インターネットをフル活用して、どんな学校をつくりだそうとしているのか好奇心が掻き立てられた。そこにはきっと、この本で追いつめている「2030年の学校像」のヒントがあると直感したのだ。僕はさっそくN高の挑戦を聞き、新しい学校像を議論するために夏野さんを訪ねることになった。

「誰のための教育なのか」、今こそ目的に立ち戻るとき

株式会社ドワンゴの本社は、東銀座の歌舞伎座に隣接する高層オフィスビル・歌舞伎座タワーにある。清潔感のあるオフィスの壁を、ニコニコ動画の番組PRを流すモニターや新企画のポスター

が賑わっていた。正直な気持ちを言えば、ここが学校を立ち上げの母体となった事業会社だとは、とても想像ができない。

予定時間びったりにやってきた夏野さんと、まずは久しぶりの再会を喜んだ。パリッとしたスーツを着こなした夏野さんと、グッと手を握り交わす。早速、この取材の趣旨を伝えると、夏野さんは開口一番にこう言った。

「2030年の学校づくりか。ちようどよい時期を選びましたね。なぜかという、インターネットやスマートフォンと一緒に育った世代の先生たちが、そうでない世代と交代するタイミングでしょう」

いきなり夏野さんは本質に入っていく。確かに日々、日本の高校を講演してまわっていると、スマホを身体の一部のように使いこなす20代、30代の先生たちと、40代以上の先生たちとの間では、インターネットへの考え方が大きく違っている。

夏野さんは、ビジネスのプロフェッショナルらしく、ズバズバと核心へと切り込んでいく。

「2030年の教育はどうあるべきか……と言くと、『本来あるべき教育の姿を取り戻すこと』が大それた思っています。それは『誰のための教育なのか』ということが明確になっている教育。つまり、教える側の都合に合わせた教育ではなく、受け手である子どもたちのことを第一に考えた教育を、これから私たちは取り戻さないといいけない」

子どもたちのための教育——言葉にすれば当たり前のことだが、「これが現実では十分に実現できていない」と、夏野さんは言葉をつなげる。

「文部科学省の学習指導要領を見ればわかるように、現行の教育制度は『最低限レベルの一律の教育を全国津々浦々に保証しよう』というシステムと言える。これは、戦後から高度成長期には非常に有効に機能してきたシステムだ。しかし、時代はITの到来を迎えて、社会はあの頃から信じられないほど様変わりした。にもかかわらず、現在の教育システムはまったく時代の変化に対応していないんだよ」

なぜ教育システムが時代についていけないのか。その問題の根本に「日々の業務に忙殺されて、変化に対応する時間がない先生たちの存在がある」と、夏野さんは指摘する。

「教育システムが受け手である子どもたちに最適化しないのは、教え手の大人たちが日々の業務に追われていて時代の変化についていけないからかもしれない。変化と向き合う機会、時間、余裕がなさすぎる。先生方の仕事場がIT化せずに、きわめて膨大な事務仕事を抱えながら、授業づくりを行っている現状では時代にあつた変化などできるわけがありません。これは教育のシステムの決定的な欠陥かもしれないですね」

夏野さんとの議論は開始早々、本質を深堀りしていく。